

爲御迎御出。其時立物七つ有之胃をめし、黃羅紗の長羽織御膝を過申程長きをめし、御從兵は不殘道より脇へ御除け、御一人路側に御つくばひ被成候處、秀吉公馬より飛下り高德公の御手を取り、扱もく若き出立見事かな。内藏助事は早速退治可申、とくく先へと被仰。菊池大 學話

一、天正十年魚津城攻の事

天正十年五月魚津の城は、上杉景勝より芋川縫殿・しつたか左京・鐵孫左衛門・岩井備中を入置く。信長公より此城を被攻、柴田勝家・高德公等寄手也。越後より後詰人數三千餘兵を出し、黒部川の近所吉田と云所へ来る。寄手の方へは後詰一萬餘人と聞えたり。後詰到着の翌日、魚津より三里許下、天神山へ取上り見分の處、上杉家の人數傳聞くよりは少しとて各勢へり。然處に信州河中島・松代より、森庄藏援兵として越後二本木迄發向との注進也。景勝より和議を入退散す。其二日目に信長公の凶變告来る。鳥羽老 入話

一、微妙公諸軍の騒亂を鎮め給ふ

大坂陣五月八日秀頼公自殺ありて、伊達政宗陣所より惣鐵炮打掛たり。其響千萬の雷の如し。諸軍大に噪ぎ、謀叛人出

來かと備うき立たり。微妙公時に二十三歳、團扇を揮て乘廻し、此方の人數は丸く立よ。餘人には眼をかけそ。若し御旗本へ掛る者あらば、是を敵と定めよと下知し給ひ乘廻り給ふ。うき足に成たる備足元定り、山に倚掛りたる様に成たると、山崎閑齋も云。或人 聞之。

一、石田・小西等家康公を討んと高德公へ内談

慶長三年八月十八日大閣薨御の冬、石田三成・小西攝津守等示談せるは、徳川家康はや太閣の遺命を背けり。往々秀頼公へ天下を可被渡体にてなし。勢の微なる内に家康に腹切らせんと談合しぬ。但兩人にては人々のおもふ所も如何とて、大納言利家公へ時々右の趣を内談す。家康公伏見の向島に居給ふ。近日取巻き、堤を切て水攻にし、扱和談を入れて家康に腹切せ可申と一決す。此時利家公、羽柴越中守忠興を呼て密に右の意趣を談じ、事既に近にあり不可油斷。貴殿は久敷知音且縁者に付、大事を爲知申とあり。忠興忝儀身に餘り候。今晚は浦生飛驒守宅へ茶會に約束し候。明日又參り彌御示談可申とて被歸候。直に家康公へ參りぬ。折節勢多の山岡道阿彌被罷越候。忠興云。此頃茶を持きらし

候。御茶を被下度伺公仕候とあり。家康公如何思召候哉、茶は致所持候。我等事無調法且獨客は習のありと承候。幸ひ忠興を師匠にし、一人客の様子を稽古可仕とて、早速被仰付候へば、道阿彌は歸被申候。扱數寄屋にて右の品々語り出し給へば、家康公大に驚き給うて、盡未來忠興へ疎略有之間敷候と誓言を以て被仰候。扱利家へは和談に仕候間、其御心得可被成とて被歸ぬ。扱又利家公へ被參、最前の様子家康へ委細申入候と被申ければ、公甚驚給ひ、貴殿は氣が違ひ申かと仰ければ、忠興、石田・小西が爲体を見るに、貴公は近年の内に世を去り給ふべし。其前に貴公を大將にし家康を滅し、其後貴公世を去給はゞ、六ヶ敷兩將を失ひ天下を可取との工みと存候。利長公の世に成て家康に御隨ひ候はん哉、石田に御屬し可成か、此所を御考可然と被申候。公暫く御思案にて、家老衆御呼出し御談合ありて、忠興の謀尤とて和談に一決しぬ。